

TOP MUSEUM



東京都写真美術館ニュース
eyes106

リバーシブルな未来
日本・オーストラリアの現代写真

宮崎学
イマドキの野生動物

eyes TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM
NEWS MAGAZINE / 2021 Vol.106

リバーシブルな未来 日本・オーストラリアの現代写真

3F | 2021.8.24 | 火 | - 10.31 | 日 |

Reversible Destiny

Australian and Japanese contemporary photography

メルボルン大学の協力を得て、同大学教授ナタリー・キングとの共同企画として開催する本展覧会は、オーストラリアと日本から注目作家を集めたグループ展です。歴史や自然環境などあらゆる点で異なる背景をもつ両国ですが、それぞれが豊かな文化を持ち、国際的に独自の地位を築いてきました。そんな二カ国の“今”を映し出す写真作品を集めた本企画の意図や見どころとは、どのようなものなのでしょうか？ 本展を担当する山田裕理学芸員に話を聞きました。

(本展覧会は、2020年に開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響のため、会期を変更して開催いたします。)

本展は日本とオーストラリアからそれぞれ4名ずつ、合計8名が参加するグループ展となるのですが、まずオーストラリアにおけるアートの状況について簡単にお教えください。

オーストラリアは世界のアート界で重要な役割

を果たしてきた国のひとつと言って良いと思います。大規模な美術館が複数ありますし、来年に23回目の開催を予定しているシドニー・ビエンナーレは、アジア・太平洋地域でもっとも古い歴史をもつ国際芸術祭で、トレイシー・モファットなどの重要作家が育つ土壌となってきました。

東京都写真美術館ではこれまでに、今回の共同企画者でもあるナタリー・キングが手がけた二つの展覧会「オーストラリア現代写真展 世界は歪んでいる」(2004年)と、「オーストラリア現代作家 デスティニー・ディーコン」(2006年)を開催し、第一線で活躍する写真作家を日本で先がけて紹介してきましたが、前回からすでに15年が経っています。今回は、社会情勢の変化をふまえたアップデート版として、世界的に注目されているオーストラリアの現代写真をいち早くリサーチし、魅力的な作品を日本人作家とあわせて紹介する機会にしたいと考えています。

未来はリバーシブル

展覧会名にある「リバーシブルな未来」にはど

んな思いが込められているのでしょうか？

この言葉には、一見真逆にも思えるような事柄が、実は隣り合わせにつながっている自分たちの運命、といった意味が込められています。例えば、写真はもともと過去と密接に結びついているメディアで、ストレートな写真はもちろん、表現手段として使われている現代アートの場合でも、写されている人物やものが撮影されたその時に存在していたということは間違いのない事実です。しかし、今回の展覧会では、写真に過去を見るだけではなく、そこに未来を見て欲しいと思っています。過去と未来は表裏一体のようなところがあって、未来は過去によってその輪郭が立ち現れてくることがありますし、逆に未来を見据えることで過去が理解できることもあります。また、時間だけではなく、写真表現を考えるうえで欠かすことのできない「記憶と忘却」「生と死」といった問題も同じようにリバーシブルにとらえることで、どのように未来に向かっていけるかを考えることができるのではないかと思います。

今回の展示は鑑賞者に社会的な問題を提起する作品で構成されているのでしょうか？

写真である以上、社会とは切り離せないところはあると思いますが、自分が生きている社会や歴史、文脈をふまえながら、社会と個人の問題を行き来しながら制作している作家の作品を選んでいきます。

例えば、片山真理は自身の身体をモチーフにしたセルフポートレートが多く、個人的な経験に基づいた作品が多い作家という印象があるかもしれませんが、彼女の作品は自身が生きる社会も前提のひとつとして成り立っています。ここでは、「個人と社会」が「リバーシブル」な関係といえますし、そのほかにもいろいろな“表裏”が隠されているのではないかと思います。



片山真理《in the water #008》2019年 © Katayama Mari, courtesy of Akio Nagasawa Gallery



マレイ・クラーク《ロング・ジャーニー・ホーム2》2018年 © Maree Clarke, courtesy of Vivien Anderson Gallery

表紙/ポリクセニア・パパペトローウ《来訪者》(世界のはざま)より2012年 © Polixeni Papapetrou, courtesy of Michael Reid Gallery, Jarvis Dooney Galerie

それぞれの国の“今”
を映し出す

日本で初展示となるマレイ・クラークは、先住民・アボリジナルの作家だとうかがいました。海岸をロケーションにした作品に写る人物の服装は、何を意味しているのでしょうか？

アボリジナルがオーストラリア大陸に住み始めたのは、少なくとも4~5万年前からと言われてい



ローズマリー・ラング《effort and rush #1》2015年
© Rosemary Laing, courtesy of Tolarno Galleries

ます。ところが植民地化されてからは、住む場所を追われ、町のはずれや、政府や協会が設立した伝道所や保護区に住むことを余儀なくされる状況が、1967年の憲法改正まで続きました。そして彼らは、生きる土地だけでなく、先祖から受け継いできた祭祀や風習までも失い続けていたのです。クラークの《ロング・ジャーニー・ホーム2》でクラークの家族が羽織っているのは、かつて伝統

的に受け継がれてきたポッサムの毛皮のマントです。クラークは写真を撮ることで、伝統的な習慣を蘇らせ、伝統、記憶、そして風習の遺物を融合させているのです。

オーストラリアの歴史や文化的背景を考察したコンセプチュアルな写真作品で国際的評価を得ているローズマリー・ラングの出品作品は、一見するとターナー

の風景画のようにも見えますね？

雄大な国土をもつオーストラリアのアーティストにとって自然は重要なテーマの一つとなっていますが、西洋文化における風景画は歴史的に、領土や財産を示すための政治的な側面をもったジャンルでもありました。ラングは〈effort and rush〉シリーズをあえてブレたイメージで表現していますが、過去や現在といった時間の境界を



ヴァル・ウェンズ《カワァ・イジェン4(イジェン火山の噴火口、インドネシア)》〈パニユワンギ〉より 2018年
© Val Wens, courtesy of KRONENBERG MAIS WRIGHT

曖昧にしているように見えますし、また画面構成においてルーベンスの「レウキッポスの娘たちの略奪」を参照していることも考え合わせると、非常に示唆的な作品であると思います。

移民国家でもあるオーストラリアの側面を表す作家も出品されているのでしょうか？

インドネシア出身であるヴァル・ウェンズの〈パニユワンギ〉シリーズは、東ジャバにある硫黄鉱山のイジェン火山で撮影を行い、危険な毒ガスが充満する環境の中、作家本人がジャグリングやバランスをとるポーズをする「バランシング・アクト」の様子を写しています。豊かな文化を持ちつつも、多くの問題や歴史的背景を抱え、物事が複雑に絡み合う現代において、自身のアイデンティティと、自然と人工の対比、生と死のサイクル、民族や宗教という多様性などあらゆる事象とのバランスをとる試みが繰り返されているを感じさせます。

ポリクセニ・パパペトロウは日本をはじめ世界各国で作品が紹介されてきた人気作家ですね。

とても残念なことに2018年に他界されたのですが、本展では最晩年に制作された作品を日本初公開します。パパペトロウは自身の娘やその友人たちをモデルに、さまざまな仮装や演技をさせて撮影していますが、彼女は子どもを幼少期と大人の間をつなぐ特別な存在とみなしていました。神話や物語、もしくは彼女自身の個人的な体験をなぞり、ファンタジックでありながら不穏な気配も併せ持つ独特の世界観を表しています。

日本からは畠山直哉の〈陸前高田〉シリーズが出品されますね。

写真文化の変遷は社会的風景に正面から向き合った写真を抜きには語れませんが、〈陸前高田〉シリーズは今なお東日本大震災からの復興過程にある作家の故郷を震災直後から撮り続けながら、単なる



畠山直哉 《2016年6月25日 高田町長砂》〈陸前高田〉より 2016年
© Hatakeyama Naoya, courtesy of Taka Ishii Gallery



石内都 《ひろしま #88 donor: Okimoto, S.》2010年
© Ishiuchi Miyako, courtesy of The Third Gallery Aya

記録に終わらずに“過去を見つめながら未来を考える”という姿勢が貫かれている点が重要だと考えました。今回は、同シリーズから近年撮影された作品を展示



する予定です。

その他にも、先に触れた片山真理のほか、石内都が原爆被害者の遺品を撮影した代表作〈ひろしま〉シリーズを、またイメージの起源や、自己と他者の関係性といったテーマに取り組んできた横溝静は東北の海や自身が拠点とするロンドンの風景を写した作品を出品するなど、**自国の歴史やアイデンティティ、環境問題など、さまざまなテーマに取り組む作家たちの作品が展示に展開されます。作品**

横溝静《That Day / あの日》2020年
© Yokomizo Shizuka, courtesy of Wako Works of Art

にどのような“リバーシブル”を見出すことができるのかは、鑑賞者自身にゆだねられているとも言えるのかもしれませんが、その分、**未来も見る者の数だけありえるということになりますね？**

過去の記憶や未来像は私たちの内にあり、自次第でいかようにも変化するものです。こうした姿勢で作品と向き合うことはまるで正解のない謎解きのようにもありますが、本展にはそうした行為を楽しめる魅力的な作品が揃っております。ぜひ作品を直接ご覧になりながら、今を生きる私たちがつくっていく未来の可能性について想像をめぐらせていただけたらと思います。

(インタビュー・構成 富田 秋子)

リバーシブルな未来 日本・オーストラリアの現代写真

Reversible Destiny
Australian and Japanese
contemporary photography

3F 2021.8.24|火| - 10.31|日|

日本とオーストラリアという二つの国にはそれぞれ歴史的背景があり、そこに住む人々は独自の精神文化を培っています。しかしながら、グローバル化が急速に進むなか、想像をはるかに超える出来事が日々当たり前のように起こる現代では、私たちが国という枠を越えて共有できるものはますます多くなっています。このような現代の社会において、写真表現はどのような意味をもっているのでしょうか。

写真は、過去や社会と密接に絡み合い、私たちの時間の概念をゆるがし、個人の経験と社会構造をつなぐ力をもっています。本展の出品作品は、過去と未来、経験と未知、記憶と忘却、生と死など対立するものの間を行き来し、その循環から、新たな視座、可逆的な思考へと導いてくれます。作家たちの写真・映像表現をご高覧いただくとともに、本展が、私たちの未来を考察する一助となれば幸いです。

出品作家

マレイ・クラーク、ローズマリー・ラング、ポリクセニ・パパペトロウ、ヴァル・ウエンス、石内都、片山真理、畠山直哉、横溝静

関連イベント

本展会期中に出品作家および共同企画者等が登壇する国際シンポジウムをオンラインで開催します。オンライン上でどなたでもご参加いただけます。最新情報は当館ホームページでご確認ください。

[観覧料] 一般 700円 ほか 各種割引あり
※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは当館ホームページをご参照ください。
[主催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館 / 東京新聞 [特別協力] メルボルン大学 [助成] オーストラリア大使館 / 豪日交流基金 / 公益財団法人吉野石膏美術振興財団 [協力] 東京藝術大学

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。



展覧会共同企画者

ナタリー・キング(メルボルン大学教授)よりメッセージ

「リバーシブルな未来 日本・オーストラリアの現代写真」展は、日豪それぞれの国で活躍する現代写真作家のグループ展です。私が東京都写真美術館で展覧会を企画するのは3回目となりますが、今回は作家たちの表現を通じ、日本とオーストラリアという歴史的背景や文化の異なる二国間の差異や共有できるものをひとつずつ丁寧にすくいあげたいと考えています。

私たちが生きている時代は激動の只中にあるだけでなく、地球がいためつけられて、さまざまな天変地異が各地でおこっていますが、オーストラリアも例外ではありません。また、エアーズロックの名で知られる巨大な一枚岩のあるエリア、ウルルが立ち入り禁止となったことが、日本でも大きく報道されたとうかがいました。あの地は先住民であるアボリジナルの聖地であり、土足で立ち入ら

れることは彼らにとって大変な苦痛であったに違いありません。ウルルに関しては彼らの長年の願いがやっと聞き入れられたわけですが、先住民をとりまく環境は今も大変厳しく、複雑です。このようにオーストラリアは、万国共通の状況を共有しながらも、特有の問題を数多く抱えているのです。

オーストラリアではアボリジナル系とそうではない者がともに働くことは非常にめずらしいのですが、私は長年、メンターとして仰ぐアボリジナル系男性キュレーターと仕事をともにしてきました。そのおかげで多くのことを学ぶことができましたし、オーストラリア特有の問題に取り組むことが美術家としての自分の重要な基本姿勢でありつづけてきたのです。そして、これは私なりの和解の方法でもあります。なぜなら、協働しながら互いの差異や共有できるものを知ること

Message

が、新しい未来をつくっていくひとつの手段であり、希望であるからです。

日本とオーストラリアは近いようでいて、実はお互いに知らないことがたくさんあるのではないのでしょうか。本展覧会では、過去を振り返りながら自分たちの宿命について問いただし、それを作品にしようとする優れた作家たちの作品を、オーストラリアと日本の両国から紹介したいと考えています。そして、展覧会場を作家や来場者のみなさんとともに考えることのできる場にできれば、これほど嬉しいことはありません。

このテキストは、本誌101号に掲載したナタリー・キング氏の談話を再構成したものです。

宮崎学 イマドキの野生動物

Miyazaki Manabu: Wild Animals Now

2F 2021.8.24|火|-10.31|日|



《ツキノワグマのカメラマン、長野県、中央アルプス》
〈イマドキの野生動物〉より 2006年

宮崎学(1949-)は中央アルプスの麓、長野県上伊那郡南向村(現・中川村)に生まれ、伊那谷の自然豊かな環境を活かし、1972年よりフリーの写真家として活動を開始しました。「自然界の報道写真家」として、現在も日本中の自然を観察しています。

宮崎は動物たちの通り道に自作の赤外線センサー付きのロボットカメラを設置し、撮影困難な野生の姿を撮影した〈けもの道〉のシリーズなど、哺乳類、猛禽類の撮影において独自の分野を開拓してきました。また、人間の生活空間近くに出没する野生動物や、外来動物の影響など、

動物の生態を通して人間社会を浮き上がらせる社会性のあるテーマにも取り組んでいます。シリーズ最新作となる〈新・アニマルアイズ〉〈君に見せたい空がある〉は「動物たちの住む森を動物の目線で見える」をコンセプトに、動物たちの痕跡を注意深く読み解き、自作のロボットカメラで人間の目が及ばない世界をみごとに写し出しています。本展覧会は、12のシリーズを7章に分けて紹介し、半世紀近くにわたる宮崎の作家活動の軌跡をたどりながら、黙して語らぬ自然の姿を浮き彫りにしようとするものです。

第1章 〈ニホンカモシカ〉1970-1973



〈ニホンカモシカ〉より 1970-1973年
中央アルプスの稜線から下界を見下ろすニホンカモシカ

【主催】公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館 【後援】信濃毎日新聞社 【協賛】ニコン/ニコンイメージングジャパン/
東京都写真美術館支援会員 【協力】モンベル
【観覧料】一般700円 ほか 各種割引あり
※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは当館ホームページをご参照ください。

第2章

〈けもの道〉1976-1977/〈倒木のけもの道〉2012-2013/
〈岩田の森 けもの道〉2011-2012



《キツネ》〈倒木のけもの道〉より 2012-2013年 口いっぱい獲物をくわえて家路を急ぐ

第3章 〈鷲と鷹〉1965-1980



《クマタカ》〈鷲と鷹〉より 1965-1980年 東京都写真美術館蔵
鋭い目つきで周囲をうかがうクマタカ

第4章 〈フクロウ〉1982-1988



《巣立ちが近いヒナ》〈フクロウ〉より 1982-1988年 東京都写真美術館蔵 愛らしい表情のなかにも野生のもつ猛々しさがある

宮崎学

Miyazaki
Manabu

1949年長野県生まれ。自然と人間をテーマに、社会的視点にたった「自然界の報道写真家」として活動。「けもの道」を中心とした哺乳類及び猛禽類の撮影では自作の自動撮影カメラを駆使し、独自の分野を開拓する。近年では日本各地で問題となっている獣害被害のアドバイザーとしても活躍。

第5章 〈死〉1993／〈死を食べる〉2012-2016



《冬の死・ニホンジカ》〈死〉より 1993年(1月27日6時36分)東京都写真美術館蔵



《冬のリスはタヌキの死体から動物脂肪を求めている》〈死を食べる〉より 2012-2016年

第6章 〈アニマル黙示録／イマドキの野生動物〉1993-2012



《漂流物の台所洗剤のキャップを宿にしたオカヤドカリ》〈アニマル黙示録／イマドキの野生動物〉より 1993-2012年「ヤクルト・ヤドカリ」や「キユーピー・ヤドカリ」も。いまや世界中の海は私たちの身近なゴミであふれかえっている

第7章 新・アニマルアイズ／君に見せたい空がある 最新作・初公開



《獣害フェンスをよじ登るツキノワグマ》〈新・アニマルアイズ〉より 2018-2021年

〈新・アニマルアイズ〉2018-2021

「動物の住む森を動物の目線から見ることをコンセプトに、動物たちの痕跡を注意深く読み解きながら、森の中の屋外スタジオに自作のロボットカメラを設置し、人間の目が及ばない瞬間を写し出した最新作です。圧倒的な臨場感をもった映像の数々は、まるで彼らの隣に居合わせたかのような迫力で見られるものを圧倒します。

〈君に見せたい空がある〉2020-2021

レンズをなめられるほど、カメラの近くに来てもらうため、動物たちの行動を予測し、画面に写し込んだ作品は、それまで宮崎が培った技術のすべてが盛り込まれた集大成となっています。動物たちが森の中でどのような暮らしをしているのか、彼らの目線から知ることができるシリーズです。



《ニホンザル》〈君に見せたい空がある〉より 2020-2021年 (サルがレンズを怪訝そうに見つめていた)



山城知佳子 リフレーミング

Yamashiro Chikako: Reframing the land / mind / body-scape

B1F 2021.8.17|火|- 10.10|日|



《リフレーミング》2021年(新作) © Chikako Yamashiro Courtesy of Yumiko Chiba Associates

映像・写真を主たるメディアとして、2000年代から精力的に作家活動を進めてきた山城知佳子(1976年沖縄県那覇市生まれ/在住)は、生まれ育った沖縄の歴史や地政学的状況と自身との関係に向き合うことを通じて、見過ごされ聞き過ごされてきた声や肉体、魂を伝える作品を手掛け、国内外で高く評価されてきました。

山城が生み出す映像は、見る者の身体感覚に訴えかけるイメージの豊饒さと詩性、そして同時代を見つめる批評的な視点を絶妙なバランスであわせ持つがゆえに、沖縄という特定の地域の問題に留まらず、より広

い文脈での読み込みや解釈に開かれています。

公立美術館初個展となる本展では、初公開となる山城の最新作を、収蔵作品を中心とした過去の代表作品と組み合わせて紹介します。単に時系列に沿って作品の変遷をたどるのではなく、新旧の作品を有機的に配置することで、相互に共鳴する主題やモチーフの連なりを、展示室内を回遊しながら巡る構成とします。

最新作のタイトルでもある「リフレーミング」とは、ものごとを見てい

る枠組みを変え、別の枠組みで見直すことを指しており、写真・映像によって故郷沖縄の風景を新たな視点でとらえなおし見つめていくという、山城作品に通底する姿勢を象徴します。本展は、国際的にもさらなる飛躍が期待される映像アーティスト・山城知佳子のミッドキャリア個展として、その作品世界を総覧するはじめての本格的な機会となります。

| 関連イベント

会期中に関連事業を開催する予定です。最新情報は当館ホームページをご参照ください。

山城 知佳子

Yamashiro
Chikako

映像作家、美術家。1976年沖縄県那覇市生まれ、在住。1999年沖縄県立芸術大学美術工芸学部美術学科絵画専攻(油画)卒業。2002年沖縄県立芸術大学大学院造形芸術研究科環境造形専攻修了。2019年より東京芸術大学美術学部先端芸術表現科准教授。主な書籍に『循環する世界 山城知佳子の芸術』2016年、『Chikako Yamashiro』2012年(ともにユミコチバパソシエイツ刊)がある

[主催] 東京都/公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館/日本経済新聞社 [助成] 公益財団法人花王芸術・科学財団
[観覧料] 一般 700円 ほか 各種割引あり
※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは当館ホームページをご参照ください。

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。



日本の新進作家 vol.18 (仮称)

Contemporary Japanese Photography vol.18

3F 2021.11.6|土|- 2022.1.23|日|



山元彩香《organ》2019年 ©Ayaka Yamamoto, courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film

出品作家 池田宏、小森はるか+瀬尾夏美、潘逸舟、山元彩香、吉田志穂

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
[主催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。



松江泰治 (仮称)

Matsue Taiji

2F 2021.11.9|火|- 2022.1.23|日|

松江泰治は世界各地の地表を独自の視点で写してきました。作家が撮影時に設けた、画面に地平線や空を含めない、被写体に影が生じない順光で撮影するといったルールは、写真の本質を問い直すような平面性を生み出しています。本展では国内外の名だたる美術館に作品が収蔵されるなど、国際的に高い評価を得ている作家の近作から最新作までを紹介し、その作品の魅力を探ります。



松江泰治《TYO 90835》2021年 発色現像方式印画 個人蔵
© TAIJI MATSUE Courtesy of TARO NASU

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
[主催] 東京都/公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。



支援会員

東京都写真美術館の活動をご支援いただくため、
次の企業・団体に支援会員としてご入会いただきました。

《特別賛助会員》
キャノン(株)
(株)資生堂
全日本空輸(株)
(株)ニコン

《賛助会員》
キャノンマーケティングジャパン(株)
ゲッティイメージズジャパン(株)
大日本印刷(株)
東急建設(株)
凸版印刷(株)
富士フイルム(株)

《特別支援会員》
アサヒグループホールディングス(株)
サッポロ不動産開発(株)
サッポロホールディングス(株)
リコーイメージング(株)

《支援会員》
(株)アール&キャリア
(株)I&S BBDO
あいおいニッセイ同和損害保険(株)
アオイネオン(株)
(株)浅沼商会
旭化成(株)
(株)朝日工業社
朝日新聞社
(株)朝日新聞出版
朝日生命保険(相)
(有)アスベン/POLARIS
(株)アマナ
(株)岩波書店
(株)潮出版社
(株)栄光社
(株)エージーピー
(株)ADKクリエイティブ・ワン
SMBC日興証券(株)
NHK営業サービス(株)
(株)NHKエデュケーション
(株)NHKエンタープライズ
(株)NHK出版
(株)NHKテクノロジーズ
(株)NHKビジネスクリエイト
エルメス財団
OMデジタルソリューションズ(株)

(株)オンワードホールディングス
カールツァイス(株)
花王(株)
鹿島建設(株)
(株)KADOKAWA
カトーレック(株)
神奈川新聞社
カメラショップ(株)
(株)カメラの三和
(株)キクチ科学研究所
(株)キタムラ
キックマン(株)
(株)紀伊屋書店
ギャラリー小柳
共同印刷(株)
(一社)共同通信社
空港施設(株)
(株)久米設計
グロリー(株)
(株)ケー・アンド・エル
興亜硝子(株)
(株)弘亜社
(株)公栄社
(株)廣濟堂
(株)講談社
(株)光文社
(株)国書刊行会
(株)コスモスインターナショナル
小山登美夫ギャラリー(株)
佐川印刷(株)
三菱石油(株)
三機工業(株)
産経新聞社
サントリーホールディングス(株)
(株)サンライズ
(株)ジェイアール東日本企画
JSR(株)
JXTGホールディングス(株)
(株)JTBC
(株)シグマ
(株)実業之日本社
信濃毎日新聞社
清水建設(株)
(株)写真弘社
写真の学校/東京写真学園
チャンネル(同)
(株)集英社
(株)シュッピン(株)
(株)小学館
松竹(株)
信越化学工業(株)
(株)新潮社

(株)スタジオアリス
(株)スタジオエムジー
(株)スタジオジブリ
(株)SUBARU
住友生命保険(相)
(株)住友倉庫
(株)生活の友社
セイコーホールディングス(株)
双日(株)
ソニーグループ(株)
損害保険ジャパン(株)
第一生命保険(株)
第一法規(株)
(株)ダイケンビルサービス
台新国際商業銀行
大成建設(株)
大和証券(株)
(有)タカ・イシギギャラリー
(株)高島屋
(株)宝島社
(株)竹中工務店
(株)タニタ
(株)タムロン
(株)丹青社
(株)中央公論新社
中外製薬(株)
(株)TBSテレビ
デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム(株)
(株)テレビ朝日
(株)テレビ東京
電源開発(株)
(株)電通
東亜建設工業(株)
東映(株)
(株)東京印書館
東京空港交通(株)
東京工科大学/日本工学院
東京工芸大学
東京新聞・中日新聞社
(株)東京スタジオ
東京造形大学
東京総合写真専門学校
東京建物(株)
東京地下鉄(株)
東京テアトル(株)
東京都競馬(株)
(株)東京ドーム
(株)東京ニュース通信社
(学)専門学校 東京ビジュアル
アーツ
(株)東京美術倶楽部

東京メトロポリタンテレビジョン(株)
(株)東芝
東宝(株)
(株)東北新社
(株)東洋経済新報社
(株)徳間書店
戸田建設(株)
(株)トロクマネージメント
(株)Nana
(株)ニコンイメージングジャパン
日油(株)
日活(株)
(株)日経BP
日光ケミカルズ(株)
日本空港ビルデング(株)
日本経済新聞社
日本航空電子工業(株)
(株)日本広告社
(公社)日本広告写真家協会
日本写真印刷コミュニケー
ションズ(株)
(公社)日本写真家協会
(公社)日本写真協会
日本写真芸術専門学校
(一社)日本写真文化協会
日本生命保険(相)
日本大学芸術学部
(株)日本デザインセンター
(株)ニッポン放送
(株)テレコードマネジメント(株)
日本レコードマネジメント(株)
日本ロレックス(株)
(株)ニューアートディフェ
ーション
野村證券(株)
(株)博報堂
(株)博報堂DYメディア
パートナーズ
(株)博報堂プロダクツ
(株)ハースト婦人画報社
(株)ハーツ
パナソニック(株)
(株)パラゴン
びあ(株)
北海道 写真の町東川町
(株)美術出版社
(株)ビックカメラ
(株)ピラミッドフィルム
(株)ファーストリテイリング
(株)フェドラ
(株)フジテレビジョン
(株)フジヤカメラ店

(株)プリンスホテル
(株)フレームマン
プロフォト(株)
(株)文化工房
(株)文藝春秋
北海道新聞社
(株)ホテルオークラ東京
本田技研工業(株)
毎日新聞社
丸善(株)
マルミ光機(株)
(株)マンダム
(株)みずほ銀行
三井住友海上火災保険(株)
三井倉庫ホールディングス(株)
三井不動産(株)
三菱地所(株)
三菱製紙(株)
三菱倉庫(株)
三菱UFJ信託銀行(株)
(株)ミルボン
武蔵大学
明治安田生命保険(相)
森ビル(株)
ヤマト運輸(株)
(株)吉野工業所
(株)ヨドバシカメラ
読売新聞社
ライオン(株)
ライカカメラジャパン(株)
(株)良品計画
(株)ロボット
(株)ワコウ・ワークス・オブ・
アート
(株)ワコール
(他2社)



展示会の開催に合わせて、品揃えがガラリと変わるミュージアム・ショップ。全4色のアートスタンドや個性的なスクエアフレームを販売しています。オリジナルポストカードも数多く取り揃えていますので、お気に入りの一枚を見つけたら、フレームに入れて飾ってみてはいかがでしょうか。

Art Mount Stand(4色) 850円(税込)
Standard Frame Square/Small 1,320円(税込)
※ポストカードは別売となります。

詳細
ページは
こちら▶

[営業時間] 10:00-18:00 [TEL] 03-6447-7684
[定休日] 毎週月曜日ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

1F
CAFE
カフェ

フロムトップ

1階にカフェ「フロムトップ」があたらしくオープンしました。冷たい飲み物やデザートをご用意していますので、鑑賞の合間にぜひお立ち寄りください。

SCHEDULE / スケジュール

展覧会・イベント・上映の最新情報は、
topmuseum.jpまたはこちらへ▶



	3F	2F	B1F	1F
2021 8				
9	リバーシブルな未来 日本・オーストラリアの 現代写真(企) 8.24(火) - 10.31(日)	宮崎学 イマドキの野生動物(企) 8.24(火) - 10.31(日)	山城知佳子 リフレミング(収) 8.17(火) - 10.10(日)	『カウラは忘れない』 『サンマデモクラシー』 『ガンダーマン』 優しき裏切り者の歌』 8.7(土) - 8.29(日)
10			写真新世紀展2021 10.16(土) - 11.14(日)	
11	日本の新進作家 vol.18(企) 11.6(土) - 2022.1.23(日)	松江泰治(収) 11.9(火) - 2022.1.23(日)	Prix Pictet(プリピクテ) 11.20(土) - 2022.1.23(日)	
12				
2022 1				「ぐるっとバス 2021」 ▼詳細はこちら▼
2	第14回恵比寿映像祭 2.4(金) - 2.20(日)			
3	写真発祥地の原風景 はこだて(収) 3.2(水) - 5.8(日)	TOPコレクション 光のメディア(収) 3.2(水) - 6.5(日)	APAアワード2022 2.26(土) - 3.13(日) 本城直季展 3.19(土) - 5.15(日)	(収) 収蔵展 (企) 企画展

東京都写真美術館 年間パスポート「TOPMUSEUM PASSPORT 2021」販売中



展覧会を無料または割引でご鑑賞いただけるお得なパスポートです。

販売期間：2021年9月30日(木)まで 有効期間：購入日～2022年5月8日(日)*

販売価格：3,300円(税込)

販売場所：1階 総合受付

*一部特典の有効期間は2022年3月31日(木)まで

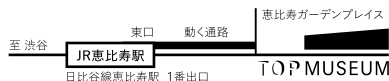
スケジュール内の(収)は無料、(企)は4回まで無料、
その他は割引料金となります。特典の詳細は、当館
ホームページのご利用案内からご確認ください。

年間パスポートの
詳細はこちら▶



東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM



JR恵比寿駅東口より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分※当館には専用駐車場はありません。恵比寿ガーデンプレイスの駐車場をご利用ください。

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel.03-3280-0099 topmuseum.jp

開館時間 10:00-18:00 ※入館は閉館30分前まで。

休館日 毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館)

東京都写真美術館ニュース「アイズ2021」106号 □発行日：2021年8月24日/企画・編集：東京都写真美術館管理課企画広報係 □印刷・製本：株式会社公栄社 □発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館©2021 □本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製を禁じます。※本誌編集ページに掲載されている観覧料は、原則として消費税込みの価格です。事業内容は諸般の事情により変更することがございます。最新の情報はホームページをご覧ください。

